

ベルギー研究会 会報

コンテンツ

第2号/2014年1月

<巻頭特集>2013年12月刊行! 『ベルギーとは何か?—アイデンティティの多層性—』p.1-2
研究会の記録.....p.3-4
研究発表要旨.....p.5-9
ベルギー文学翻訳プロジェクト.....p.9-16

コラム.....p.17-21
お知らせ.....p. 22-26
会員刊行物紹介、今後の予定、募集、ベルギー関連のイベント、新規会員・事務局の紹介

Japanese vereniging voor de Studie van België - Association japonaise d'études belges - Japanische Vereinigung für Belgische Studien

2013年12月刊行!

『「ベルギー」とは何か?—アイデンティティの多層性—』

このたび、ベルギー研究会会員13名が寄稿した論文集、『ベルギーとは何か?—アイデンティティの多層性—』が松籟社より出版されました。以下、本書の紹介として、はしがきの一部を抜粋いたします。

ベルギーは現在決して特殊な「不思議な」国ではなくなり、多言語・多文化状況やマイノリティの尊重という共通の価値観が定着してきた中で、異文化理解にとっての有意義かつ具体的で現実的で明確なイメージと展望をもたらしてくれる事例になり得る。だからこそ最新の研究動向も取り入れて踏み込んだ議論をしたい。その思いが本書企画の出発点であった。「ベルギー」という地域を核とし、ある程度の共通知識を持ちその曖昧なアイデンティティーを探りたいという共通の関心に基づき、しかし多様な領域からのアプローチをする、要するに学際的な論文集である。そして、社会科学、人文学系を中心としてではあるが、1冊の論文集として組んでみた。

全体の構成は次のようなものである。まずは政治・言語状況の確認と現在の問題や議論を整理し、次に具体的に言語芸術（文学、演劇）を中心とした作品分析や、それを支えるアートマネジメントの現状の検討を行い、そしてベルギーの外とのつながりや交流の歴史と現在を最後に概観することになる。中心的なテーマや権威的な主張はないのだが、学問領域も対象とする時間・空間時空ばらばらなもの、その多様性を保ちつつ諸事象や人物たちがあちらこちらで絡まりあって一つの有機体をなすようにも思われる。その中から我々の追及する「ベルギー性」のあり所（あるいは非存在）も見えてくるのではないか。



(岩本和子「はしがき <新たな「ベルギー学」へ>」より抜粋)

目 次

はしがき—新たな「ベルギー学」へ (岩本和子)

第一部 政治と言語の複雑な関係

- ベルギー連邦制の不安定化—「非領域性原理」の後退と求心力の欠如 (正躰朝香)
- ワロン語の標準化—方言学者と復権運動家の同床異夢 (石部尚登)
- 解説(言語) ベルギーの言語状況—史的概観 (河崎靖)

第二部 言語と芸術活動の諸相 (1) 文学

- 解説(文学) ベルギーにおける文学 (三田順)
- ティル・ウーレンシュピーゲルをめぐる〈民族の記憶〉—シャルル・ド・コステルから
ヒューホ・クラウスへ (岩本和子)
- カーレル・ヴァン・デ・ウステイネ作品における「フランドレン性」の所在
—モーリス・マーテルランクの影響を手掛かりとして (三田順)
- 断片とパサーージュ—アンリ・ミショーとベルギー (田母神顯二郎)

言語と芸術活動の諸相 (2) 舞台芸術・アート活動

- ベルギーの舞台芸術 (高橋信良)
- ミシェル・ド・ゲルドロードにおける存在のモデルとしてのマリオネット (中筋朋)
- フランドレンの文化行政と一九八〇年代の「フランドレンの波」現象—文化の伝播から
創造の時代へ (井内千紗)
- ベルギーの文化マネジメント教育—ブリュッセル自由大学(ULB)の事例を基に (狩野麻里子)

第三部 歴史と交流

- 一六世紀前半ネーデルラントの統一と渉外活動—一五二九年カンブレ平和条約履行における
ネーデルラント使節ジャン・ド・ル・ソーの機能 (加来奈奈)
 - 近代日本における商品陳列所の受容—ブリュッセル商業博物館からの学習と展開 (三宅拓也)
 - OIF(フランコフォニー国際機関)とベルギー (中條健志)
- あとがき (石部尚登)

<書誌情報>

『ベルギーとは何か?—アイデンティティの多層性—』 (松籟社)

岩本和子・石部尚登 (編)

2013年12月20日、309頁、定価:本体3000+税

ISBN: 978-4-87984-433-7 C0036

研究会の記録

2013年は8回研究会を実施し、12月には通算50回目をむかえました！来年も継続的にネットワークを広げつつ、研究会を実施いたします。以下が2013年の研究会の記録です。（非会員は名前の後に*印）

第43回研究会

日時：2013年2月7日（木）13:00-21:00
会場：神戸大学ブリュッセルオフィス、ブリュッセル
王立音楽院別館<Chêne>

第一部

【発表】「ベルギーのアルメニア人コミュニティ」
松井真之介（神戸大学）

【発表】「見出されたフランドル—ユルスナール『黒
の過程』(1968)における絵画をめぐる—」
村中由美子（東京大学）

【発表】「炭鉱からみる近代—マニフェスタ9 と‘文
化’資源としての〈炭鉱〉展を中心に」
角本摩衣子*（神戸大学／ブリュッセル自由大学）

【発表】“Some viewpoints on Belgian and Flemish
national identity in Rolf Falter’s “Belgium, a
history without a country” (België – Een
geschiedenis zonder land” – Bezige Bij Antwerpen,
2012)
フレック・アドリアース（ヘント大学講師）

第二部（講演と演奏会）

※詳細はコラム4をご参照ください。

第44回研究会

日時：2013年3月24日（日）13:30-17:30
会場：西宮市大学交流センター・セミナー室

【発表】「方言」の復権とICTの活用」
石部尚登（名古屋市立大学）

【報告】ベルギー・フランス語短篇翻訳に関する報告
岩本和子：Madeleine Bourdouxhe, *Les Jours de la
femme Louise*

小林亜美：Michel de Ghelderode, *Sortilèges*

第45回研究会

日時：2013年4月21日（日）13:00-17:00
会場：西宮市プレラホール・5階会議室

【報告】ベルギー・オランダ語短編翻訳に関する報告
鈴木義孝：Herman Teirlinck, *Het Japans masker*

【映画鑑賞】ローデンバック『死都ブリュージュ』
(1981年) (解説：岩本、三田)

第46回研究会

日時：2013年5月27日（月）17:00-19:00
会場：神戸大学国際文化学研究所・大会議室（E棟4
階）

主催：神戸大学大学院国際文化学研究所・異文化研究交
流センター(IReC)

共催：ベルギー研究会

後援：日本フランス語教育学会(SJDF)、フランダースセ
ンター

【講演】

<Les littératures francophones septentrionales :
constantes et convergences> (北方フランス語圏文学
の特徴と共通性)
ジャン=マリ・クランケンベルグ*（ベルギー王立学士院
／リエージュ大学名誉教授／ベルギーフランス語・言語
政策評議会会長）



第47回研究会

日時：2013年6月30日（日）13:30-17:30
会場：西宮市大学交流センター・セミナー室1
第一部<研究発表>

【発表】「ベルギー王立美術館のアートマネジメント分
析—ICOMによる博物館の3機能を基準として—」
狩野麻里子



第43回研究会
(神戸大学ブリュッセルオフィス)



第43回研究会
(ブリュッセル王立音楽院)



第49回研究会
(関西学院大学)

第二部 <ベルギーの外交と内政>

【発表】「ヨーロッパ統合におけるベネルクス枠組みの変容」

正躰朝香 (京都産業大学)

【報告】「ベルギーの内政」

中條健志 (大阪市立大学)

【映像作品鑑賞】

“Bye Bye Belgium” (2006年)

“TO BE OR NOT TO.be” (2008年)

第48回研究会

日時：2013年7月28日(日) 13:00-18:00

会場：日本大学理工学部・駿河台校舎5号館524室

【発表】「ベルギー北部およびブリュッセルの言語事情」

ルート・ヴァンバーレン* (日本大学)

【発表】「ベルギーにおける終末期医療に関する法的状況」

本田まり* (芝浦工業大学)

【発表】「ベルギーの現代声楽作品とその作者の一例」

正木裕子 (ブリュッセル王立音楽院)

第49回研究会

日時：2013年10月12日(土)

会場：関西学院大学・F号館 203 教室

(ベルギー研究会=日本ケベック学会2013年度全国大会 ワークショップ共催)

【ワークショップ】「ケベックとベルギー：フランス語圏の多元社会—言語、政治、文学—」

司会：大石太郎* (関西学院大学) / コーディネーター：真田桂子* (阪南大学) /

コメンテーター：丹羽卓* (金城学院大学)、岩本和子 (神戸大学)

「マルチナショナル連邦制におけるケベックの人権(言語権)を巡る論争についての考察—カナダ 1982

年憲法闘争を手掛かりに—」

荒木隆人* (京都大学)

「フラーンデレンおよびワロニーにおけるケベックの言語政策の影響」

石部尚登 (日本大学)

「ベルギー・フランス語文学におけるアイデンティティの形成と対立 —19世紀末ブリュッセルとワロニーの文学シーンを巡って」

三田順 (日本学術振興会特別研究員 PD)

「「国民文学」から「移動文学」へ ;ケベック文学における多元化とその波及」

真田桂子* (阪南大学)



第50回研究会

日時：2013年12月8日(日) 14:00-18:00

会場：大阪産業大学梅田サテライトキャンパス・セミナールーム

【発表】「開かれたコミュニタリズムの可能性—フランスの地域語学校を中心に」

松井真之介 (神戸大学)

【発表】「ベルギーと国際人権」

佐藤潤一 (大阪産業大学)

研究発表要旨

第43回

「ベルギーのアルメニア人コミュニティ」

松井真之介(神戸大学)

本発表では、古来より存在するベルギーのアルメニア人コミュニティの特徴と現状を、アルメニア人とその歴史、文化についての概要をはさみつつ総括的に紹介する。

14世紀から始まるベルギーのアルメニア人コミュニティは、ブルッヘにおいて絨毯を中心とする東西貿易の仲介商人と聖職者、知識人を中心に始まる。その後19世紀末から20世紀初頭にかけて、アルメニア人は絨毯貿易に加え、ベルギーのタバコ産業およびアントウェルペンのダイヤモンド産業の重要な一角を牛耳るまでになる。

商人中心のアルメニア人コミュニティの構成は1920年代に大きく変化する。1915年のオスマン帝国によるアルメニア人大虐殺からの避難民の流入によって、コミュニティはあらゆる年齢・社会階層を含むものとなる。それ以降も中東および旧ソ連の政治変動によってアルメニア人はベルギーに流入し現在に至る。

現在のベルギーのコミュニティは、ヨーロッパの政治経済センターとしての地の利を生かした活動が特徴的である。それほど大きくないコミュニティにもかかわらず、「ジェノサイド認知」活動の中心であり、コミュニティは非常に活発な様相を見せている。また、「小さくて活発な」コミュニティだからであろうか、2010年ごろから始まったアルメニア教会の分裂の余波も猛烈に受けているのも、このコミュニティの特徴としてあげられるだろう。

「見出されたフランドル—ユルスナール『黒の過程』(1968)における絵画をめぐる—」

村中由美子(東京大学)

マルグリット・ユルスナール(1903-1987)は、フランス人の父とベルギー人(フランス語系)の母を持つ、ブリュッセル生まれの作家である。しかし、生涯の大半を旅に費やし、1950年に居を定めたアメリカ・メイン州のマウント・デザート島で多くの作品を執筆したため、むしろコスモポリタン性を彼女の特徴と考えるのが一般的である。本発表では、ユルスナール作品においてこのコスモポリタン性と対照的に見出すことのできる、リージョナルな要素としてのフランドル性に焦点を当てる。具体的には、代表作の一つである『黒の過程』(1968)のなかに間接的に描かれているフランドル絵画が、この作家の文学創作においてどのような意味を持っていたかについて考察する。さらに、コスモポリタン性とフランドル性という一見相反する要素が、ユルスナール作品において有機的な結びつきを持っていることを明らかにしたい。

「炭鉱からみる近代—マニフェスタ9と'文化'資源としての〈炭鉱〉展を中心に—」

角本摩衣子(神戸大学/ブリュッセル自由大学)

昨年、ベルギーの北東部リンブルフ州のヘンクで9度目の欧州現代美術ビエンナーレ(以下、マニフェスタ)が開催された。世界中でさまざまな国際展が乱立する今、1996年の初回以来、隔年ごとにヨーロッパの異なる都市で開催されるという点で、このマニフェスタは異彩を放っている。更に、“The Deep of the Modern/近代の深遠”というテーマを掲げ、実際に使用されていた炭鉱施設を舞台に、炭鉱に関連した近代から現代までの美術作品をとり上げた今展(以下、マニフェスタ9)は、「いわゆる現代美術展のベーシックな展覧会モデルからの切り離しを故意に行った」とキュレーター・チームが自負する内容となっていた。本発表においては、同じく炭鉱を通して近代を捉えようとした「'文化'資源としての〈炭鉱〉」展(目黒区美術館、2009年)とマニフェスタ9との比較を試み、炭鉱を通じた両国の近代化の一端を紹介したい。

“Some viewpoints on Belgian and Flemish national identity in Rolf Falter’s —Belgium, a history without a country (België – Een geschiedenis zonder land – Bezige Bij Antwerpen, 2012)”

フレーク・アドリアーンズ (ヘント大学)

In —Belgium: a history without a country || Rolf Falter presents an overview of the history of Belgium from the Roman period until 2011. His focuses are one on politics, conflicts and people. His ambition was to write an alternative and neutral history of Belgium.

In this lecture, I would like to summarize three theses on nationalism and national identity in Falter’s book. First, according to Falter, Flanders was the origin of Western capitalism. —Flanders || was an empty space until the Middle Ages. Before the Middle Ages, the eastern part of the Southern Netherlands were the most important players.

Second, Falter presents Belgium as a success story in the nineteenth century. The foundation of the kingdom in 1830 marked the end of an era of chaos from the Roman period until the battle of Waterloo (except from brief more peaceful periods, e.g. forty years during the Austrian rule), turning into one of the richest nations in the world at the beginning of the twentieth century.

Last but not least, Belgium was one of the creators of the Flemish identity. It stimulated Flemish nationalism because of its lack of national identity. Falter’s point is that Flemish nationalism therefore is as little —nationalist || as Belgian nationalism, and refers in a few recent interviews to the Belgian political crisis, which will be dealt with in this lecture as well.

第44回

「方言」の復権とICTの活用

石部尚登 (名古屋市立大学)

本報告では、ベルギー南部のフランス語圏に話者領域をもつワロン語の復権運動におけるICT (情報通信技術) の活用の事例を概観することで、新しい技術の登場により可能となった新しい形態の復権運動の特徴、とりわけ「方言」の復権という特有の文脈におけるICT活用の意義や利点を明らかにし、同時にそうした運動形態が抱える問題点を指摘する。

第47回

「ベルギー王立美術館のアートマネジメント分析—ICOMによる博物館の3機能を基準として—」

狩野麻里子

本発表では、ベルギー最大・最古の美術館であるベルギー王立美術館のアートマネジメントを紹介するとともに、ICOM (世界博物館会議) によって2010年に提唱されたミュージアムの3機能 (保存、調査研究、展示・教育) を基準として分析・評価を行う。発表では、まずアートマネジメント、ICOM、ICOMによるミュージアムの定義や役割といった分析に必要な用語や概念に関する説明を行い、次に同美術館のマネジメントを各機能に沿って、過去に実施したフィールド調査と王立美術館年報を基に紹介し、その分析・評価を試みる。

「ヨーロッパ統合におけるベネルクス枠組みの変容」

正躰朝香（京都産業大学）

ヨーロッパ統合の深化において、原加盟国でもあるベネルクス三国は、統合の推進と超国家的統合の志向、小国の利益確保といった目的のために連携して積極的役割を果たしてきた。しかしながら2000年代に入って、ベネルクス内、とりわけベルギーとオランダとの立場のずれ、EU内での調停役としての役割低下がみられる。イラク戦争、欧州憲法条約への対応、ユーロ危機後の対応を中心に、ヨーロッパ統合におけるベネルクス枠組みの役割の変化について考察する。

第48回

「ベルギー北部およびブリュッセルの言語事情」

ルート・ヴァンバーレン（日本大学）

発表を2部構成で行います。前半は、ベルギー北部の言語事情について、オランダ語の中間言語の特徴・発生時期・機能を中心に述べます。文法や語彙の例を取り上げながら特徴を明確にしてから、なぜこのような言語的バリエーションが生じたかについて説明を試みる。ベルギーの政治的・社会的状況を紹介するアニメーション（4分程度）をはさんで、後半は、最近報告されたブリュッセルの複雑な言語事情についてBRIO（ブリュッセル情報・記録・研究センター）の調査報告を基に話します。

「ベルギーにおける終末期医療に関する法的状況」

本田まり（芝浦工業大学）

この報告では、ベルギーにおける終末期医療に関する法制度および近時の動向を確認する。安楽死法が制定された2002年には、緩和ケアに関する法律および患者の権利に関する法律も制定され、実務上の関連が指摘されている。連邦監督評価委員会によると、2002年から2011年までに届け出られた安楽死の総数は5537件である（82%がオランダ語、18%がフランス語）。委員会については「精神的苦痛」を拡張解釈しているという批判がある。作家ユーゴ・クラウスが、アルツハイマー病を理由として安楽死を選んだ。社会党等により安楽死法の改正案が提出されており、対象を認知症の患者または未成年者に拡張すること等が提唱されている。

第49回

「フラーンデレンおよびワロニーにおけるケベックの言語政策の影響」

石部尚登（日本大学）

ベルギーでは、1970年の国家再編で「（文化）共同体」が設立され、言語問題に関する権限はそれぞれの共同体に移譲された。それにより、現在、各共同体が自らの領域において排他的に言語政策を行っている。本発表では、オランダ語圏のフラーンデレン共同体（以下、フラーンデレン）とフランス語圏のワロニー＝ブリュッセル連合（以下、ワロニー）の2つの言語政策の実施主体について、ケベックの言語政策が与えた影響を考察する。

ケベックの言語政策は、カタルーニャやウェールズ、さらにはバルト諸国といった様々な地域・国家の言語政策に多大な影響を与えたことが指摘されている。威信言語の圧力を前に自言語の衰退を案じる地域・国家にとって、北米大陸における英語の圧倒的威光に抗してフランス語擁護を断行するケベックの取り組みは格好の参照モデルとなってきた。

こうした点からすると、フラーンデレンにおけるケベックの言語政策の影響は明らかである。両地域は、自言語の抑圧や言語的差別、長期にわたる言語対立、公的な二言語政策の頓挫、連邦からの分離独立すら視野に入れた言語ナショナリズムの昂揚など、言語的な背景において多くの共通点を有している。現在でもなおそうしたケベックの政策への関心は続いており、たとえばフラーンデレン議会付属の情報センターがケベックの言語政策の調査を行っている。また、他言語に対する排他的な政策が近年両地域に共通して観察されるという事実も、両地域の言語政策の類似性を示している。

一方で、ワロニーについては、唯一の公用語がフランス語であることは共通するものの、両国におけるフランス語の地位の違いから、ケベックの言語政策の影響はこれまでほとんど指摘されてこなかった。しかしながら、1978年のフランス語の擁護に関する共同体法やそれ以降の言語法の成立時期やその内容、共同体議会の議論におけるケベックの言語政策への頻繁な言及、1989年のフランス語評議会によるフランス語憲章の制定などの動きから、ケベックの言語政策の影響を認めることができる。それはケベックの言語政策のもつ「ステータス計画」の側面よりも、フランス語それ自体に対する「コーパス計画」の側面に関する影響である。

「ベルギー・フランス語文学におけるアイデンティティーの形成と対立——十九世紀末ブリュッセルとワロニーの文学シーンを巡って——」

三田順（日本学術振興会特別研究員 PD）

本発表では、十九世紀のベルギーにおけるフランス語文学のアイデンティティーの形成過程を考察する。1830年にオランダから独立を果たしたベルギーでは長きに亘ってフランス語のみが唯一の公用語であった。そのため文化シーンではフランス語話者がベルギー文化をリードすることになったものの、そこでは同時に言語を同じくするフランスに対するベルギーの文化的独自性の獲得が求められた。

当時、首都ブリュッセルの文壇の中心であった、フランドル出身のゲルマン系フランス語話者は、フランスに対してベルギー・フランス語文学を「北方的／ゲルマン的フランス語文学」とすることで独自性を主張し、中でもモーリス・マーテルランク、ジョルジュ・ローデンバックによって知られる「ベルギー象徴派」はその「エグゾティスム」によってパリで大きな成功を収めこととなる。しかしながら、このアイデンティティーはラテン系民族であるワロニー人にとって受け入れ難いものであった。これに対して、十九世紀末のベルギー・フランス語文壇ではブリュッセルに対抗する形でのワロニーの地域主義が主張されるが、その旗印となったのが、最初に象徴主義をベルギーにもたらしたリエージュ出身のアルベール・モッケルであった。

そこで、本来フランス生まれの唯美的な美学であった象徴主義の十九世紀末のベルギーにおける受容に注目し、ワロニーにおける文化アイデンティティーの形成に際するその役割を検討することで、ワロニーの作家がブリュッセルのフランス語作家に対してどのようにアイデンティティーを獲得しようと試みたのかを考察する。

「開かれたコミュニタリズムの可能性—フランスの地域語学校を中心に」

松井真之介(神戸大学)

本発表では、フランスに存在する地域語学校の取り組みとその特徴、そして近年の動向を、特に国家教育行政との関係性および各地域語学校のもつ独自ネットワークに注目し、国家との対立軸だけでない取り組みを分析検討する。具体的には以下の4点、「学校建設における、地方行政による援助」「国境を越える学校建設資金」「国境を越える教員」「地域語学校どうし、外国組織とのつながり・交流」に注目して分析する。事例として取り上げるのは、発表者がこの3年間で訪問したアルザス語の「ABCM」学校、バスク語の「イカシトラ」学校、カタルーニャ語(カタラン語)の「ブレッソーラ」学校。1990年代以降停滞している国家と地域語の権利獲得運動のせめぎあいの横で、地域語学校は国家管理をすり抜け、国家管理とは関係のないところで広がる越境的ネットワークを大いに利用して活動をさらに拡大させている状況が確認される。そしてこの現象は「開かれたコミュニタリズム」として評価できるのではないだろうかと思われ発表者は考えている。

「ベルギーと国際人権」

佐藤潤一(大阪産業大学)

ベルギーは、ヨーロッパにおいて、古くから国民主権の憲法を持ち、人権保障は比較的充実している印象が強いと思われる。しかし、国際人権保障の観点からベルギーの実態を見てみると、近年ベルギーにおける人権保障には動揺がみられる。ヨーロッパ人権裁判所におけるベルギーに関する代表的判例としては、Belgian Linguistic Case(Merits), 23 July 1968, Series A no. 6(全員法廷), Marckx v. Belgium, 13 June 1979, Series A no. 31, Mathieu-Mohin and Clerfayt v Belgium 2 March 1987, Series A no. 113, Banković and others v. Belgium and 16 other NATO Countries, Decision 12 December 2001, Reports 2001-XIIがある。このように、ヨーロッパ人権裁判所の判例としても重要な意味を持つベルギーに関する判例を検討することは、ヨーロッパ人権裁判所判例研究としても意義があると思われる。本報告は、ヨーロッパ人権裁判所がベルギーに対して下した近年の判決、特に Claes v. Belgium, 1 October, 2013(application no. 43418/09) (Chamber judgment)を題材に、ベルギーにおける人権保障を考えてみることにしたい。なお、報告では、あまりなじみがないと思われる国際人権保障制度についての概観を最初15分ほど時間を取って行う予定である。

ベルギー文学翻訳プロジェクト

ベルギー研究会では2011年からベルギー文学翻訳プロジェクトを立ち上げ、ベルギーのフランス語、オランダ語、ドイツ語の作家紹介や作品の試訳を行ってきました。今回はこれまで研究会でとりあげた作家のうち、以下の7名を紹介します。今後は個々に試訳した作品を集め、翻訳の出版を目指します([]内は作品の言語)。

- モーリス・マールランク/Maurice Maeterlinck [仏]
- ヘルマン・テイルリンク/Herman Teirlinck [蘭]
- ミシェル・ド・ゲルドロード/Michel de Ghelderode [仏]
- マドレーヌ・ブルドゥクス/Madeleine Bourdouxhe [仏]
- ルイ・ポール・ボーン/Louis Paul Boon [蘭]
- ヒューホ・クラウス/Hugo Claus [蘭]
- イエルーン・ブラウウェルス/Jeroen Brouwers [蘭]

モーリス・マーテルランク / Maurice Maeterlinck (1862-1949)

(紹介：岩本和子)

ベルギーのヘント出身、弁護士をめざす

- 1889 パリへ 文学活動 詩集『温室』
 戯曲『マレーヌ姫』～『タンタジールの死』：愛と死、運命、
 見えないもの、神秘
 <死の3部作><マリオネット3部作>
- 1892.5 『ペレアスとメリザンド』 *Pelléas et Mélisande*
 一象徴主義の5幕劇、ブリュッセルで出版
- 1893.5 パリ ブッフ・パリジャン劇場で制作座によって初演
 ドビュッシーがこれを観てオペラ化。10年かかる
- 1896 中期戯曲『アグラヴェンヌとセリゼット』～
- 1908 『青い鳥』 (1911 ノーベル文学賞)
 昆虫3部作『蜜蜂の生活』『白蟻の生活』『蟻の生活』
- 1930 ニースで城を買い取る
 第二次大戦中、アメリカへ
 戦後ニースへ戻り、同地で死去

**作品紹介： *Le Massacre des Innocents* 幼児虐殺**

マーテルランクの作品群のイメージは、フランドル派絵画の伝統のごく自然な延長とも言われてきた。このベルギー象徴派を代表する作家の最初の発表テキストが、『幼児虐殺 *Le Massacre des Innocents*』(1886)だったことはしかしあまり知られていない。これはピーテル・ブリューゲル(父)の絵の一枚(1566年作、新訳聖書「マタイ伝」第二章のヘロデ王によるベツレヘムの幼児虐殺をテーマとするが、ブリューゲル同時代のスペインによるフランドル支配を重ねる解釈もある)と同タイトルであり、事実この絵のイメージそのものを言語に移しかえたものと言ってよい。

邦訳については、西欧文学翻訳が隆盛を極めた明治後期から昭和初期に、マーテルランク作品についても『青い鳥』を初め多くの戯曲やエッセーの翻訳が出版された。その中で『幼児虐殺』は6、7回の出版があったようである。当然ながら現在では手に入りにくい。仏語原文テキストについては、初出は1886年3月にパリで発行された『プレイヤード』誌である(*La Pléiade* (1886.3), pp66-74.)。マーテルランクが友人と創った文芸雑誌だが、6号で廃刊になったという。1916年には短編集『戦争のかけら *Les Débris de la guerre*』に再録されたが、ただし翻訳の最後に付記された解説にあるように、冒頭の削除と変更がある。また、本翻訳で使用したのは初出と同じく冒頭部を含むテキストで1989年出版『マーテルランク 夢の心理学序説(1886-1896)』(*Maurice Maeterlinck, Introduction à une psychologie des songes et autres écrits 1886-1896, Textes réunis et commentés par Stefan Gross, <Archives du Futur>, Éditions Labor, 1985, pp11-18.*)に収められたものである。

ヘルマン・テイルリンク／Herman Teirlinck (1879-1967)

(紹介：鈴木義孝)

ブリュッセルに生まれる。1898年から1900年にかけてULBで医学を1年学んだ後、ヘント大学でドイツ語・ドイツ文学を勉強するが1年で辞める。ヘントではウースティネと知り合い、ウースティネが1929年に亡くなるまで親交を持った。1900年、最初の著作である詩集*Verzen*を出版。その翌年には最初の小説*Landelijke historiën*を出す。作家としては、当初、小説を主に発表していたが、40代になった頃から、小説だけでなく劇場作品に携わることが増えてくる。

作家活動と並行して、様々な活動に携わり、フラーンデレンの文芸雑誌*Van Nu en Straks*の後継誌*Vlaanderen*の共同創刊者となったり、教員として、オランダ語文学やオランダ語、演劇技法を教えたりする。また、オランダの新聞*Algemeen Handelsblad*のベルギー特派員や、家具工場の経営者、さらには木工業者組合の書記等もするなど幅広く活躍した。

作品は、ウースティネを第一の模範として、さらに印象派からの影響も詩などに見られる。また、年を取るにつれ、言語的にはフラーンデレンさが少なくなり、よりオランダのオランダ語的になった。



<http://schrijversgewijs.be/schrijvers/teirlinck-herman-2/>

作品紹介

作品タイトル: *Het Japans masker* (「日本の面(仮題)」)

出典: 短編集*Het lied van Peer Lobbe* (1923) に収録

あらすじ

語り手の大親友だったアンドリースが生前、話してくれた内容が中心の物語。主な登場人物は、語り手、アンドリース、彼の若い時の恋人エリーン、その妹ブラインチェ、そして姉妹の母親である。アンドリースとエリーンが幸せな日々をおくっていたある日、事件がおきる。ブラインチェが買い物から帰ってこないのだ。探しに行ったアンドリースは、林の中で彼女を見つける。だが、彼女は混乱しており、アンドリースのことを分からず、悲鳴をあげて逃げ出し家に帰ってしまう。あとを追いかけて家に戻ったアンドリースは、ブラインチェが落ちてきたのを見て、帰ろうとするが、エリーンに頼まれ、家に泊まることにする。だがその晩、エリーンは何者かに殺されてしまう。恋人を失ったアンドリースは悲しみに暮れ、形見として日本の面をエリーンの部屋から持っていく。一年後、ブラインチェと婚約をしたアンドリースは、ある日、彼女を驚かせようとその形見の面をかぶり、ブラインチェのところを訪れる。彼女は面を見るなり、以前、林の中で見つけた時のように取り乱してしまい、他人を認識できなくなってしまう。そして、ブラインチェが許しを請う言葉を口にしたところで物語が終わる。

ミシェル・ド・ゲルドロード / Michel de Ghelderode (1898-1962)

(紹介：小林亜美)

本名Adhémar Adolphe Louis Martens、ブリュッセルのイクセル地区生まれ。両親ともにフラマン系の家系だが、フランス風の教育を受ける。1918年、戯曲*La Mort regarde à la fenêtre*で作家デビューを果たしたのを皮切り戯曲、詩、短篇、随筆等さまざまな著作を発表。メーテルランクの諷刺的かつ象徴的な戯曲を思わせる戯曲作品も幾つかあるが、戯曲だけでなく短篇にも認められる悲劇性と喜劇性、神秘性と滑稽味が入り交じった型にはまらない文体はゲルドロード独自のものとして高く評価されている。このような相反するものの混交はフランドル的なものの発露とも評され、フランス語で作品を著すフラマン系の作家ゲルドロードの一大特徴となっていると言えるだろう。また、彼の作品中にはフランドルに対する固定観念的イメージや、フランドル絵画やスペイン絵画、さらにはエリザベス朝演劇からの影響も多々見受けられ、作品世界を織りなしている。なお、フランドル絵画からの影響の一例として、下記「作品紹介」で言及している短篇「*Sortilèges*」につきまとう「仮面」のモチーフを挙げておきたい。「仮面」のモチーフは、物語の舞台と推定される街がオステンドであることと相まって、オステンド出身の画家アンソール (1860-1949) を想起させるだろう。



<http://famousbelgians.net/deghelderode.htm>

作品紹介

・短篇集*Sortilèges* (1947)について

表題作を含め12篇の短篇が収録された短篇集。死への強迫観念や観念的な妄想が共通テーマであり、想像と空想と夢とが混じり合っただけで闇の奥底へと読者を誘う。著者独特のフラマン的靈感が刻印された作品集と評価される。

(Cf. Michel de Ghelderode, *Sortilèges*, Editions Gallimard, 2008年版)

・表題作「*Sortilèges*」(仮題「魔術」)

現実と夢の狭間を彷徨うような幻想的世界が、「わたし」の眼を通して描き出される。語り手の「わたし」は、「何か」、おそらくは自分自身から逃れようと逃避行を続ける男である。海へと向かう特急列車に揺られて、「わたし」が辿り着いたのはある海辺の街 - 街の名は明示されないが、オステンドを暗示する - だった。その街はその夜カーニヴァルのトランス状態に陥り、「わたし」もそこで不可思議な世界へと巻き込まれていく。孔雀の羽を振り回す老いた女商人、小舟に乗った謎めいた生物たち、街に轟めく群衆、豪奢を極めた部屋からそれを見下ろし祝福する大天使、これら夢幻的カーニバルの一切には、「仮面」のモチーフがつきまとう。その夢から醒めた後、「わたし」は再び車中の人となり、逆行の逃避行を再開する。

マドレーヌ・ブルドゥクス／Madeleine Bourdouxhe (1906 – 1996)

(紹介：岩本和子)

- 1906 リエージュに生まれる。 ULBで哲学専攻。 結婚。 作家・芸術家と交わる。
- 1937 『ジルの妻』をパリのガリマール社から出版。査読者ポーラン、Figaro紙絶賛。
- 1940 ドイツ軍のベルギー侵攻。娘Marie誕生。一家は自由フランスへ避難。反ナチのパンフレットをポール・エリュアールに届けたり、ユダヤ人女性を匿う。ナチ保護下にあったGallimard, Grassetからの出版を拒否。ブリュッセルの出版社から『マリーを探して』(1943)『ミラボー橋の下』(1944)
- 戦後 サルトルやボーヴォワールと親交：Le Temps Moderneに短篇«Les jours de la femme Louise»：『第二の性』で2小説に言及。
- 1954- 英語など各国語に翻訳。
- 1985 La Femme de Gilles 再出版。
- 1996 没
- 2004 La Femme de Gilles 映画化
- 2009 パリでシンポジウム：Colloque international «Relire Madeleine Bourdouxhe»
Centre Wallonie-Bruxelles, Paris / Jeudi 2 et vendredi 3 avril 2009
- 5 romans 内2つだけ出版：La Femme de Gilles, A la recherche de Marie
1 récit : Sous le pont Mirabeau 7 nouvelles 1985年出版
- ・1930-40年代に認められる。30年間忘れられる
 - ・1980年代、再評価、最出版：フェミニズムの流れに乗る
- 現在、再々評価。日常生活の中のヒロイズム、詩的エクリチュール、女性の欲望・自由とは。

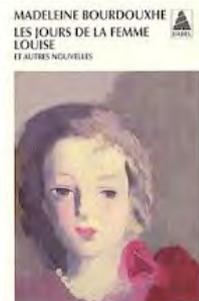


作品紹介：Les jours de la femme Louise ルイーズの日々

1947年、サルトルの主宰する『ル・タン・モデルヌLe Temps Moderne』誌に掲載される。この雑誌の性格上、ブルドゥクスは実存主義作家の一人として当時は位置付けられたと思われる。またボーヴォワールはブルドゥクスを高く評価し交友を持つが、彼女からの刺激や影響も受けて、のちの先駆的フェミニズム理論に反映させてもいる。たとえば、1949年出版の『第二の性』において、ボーヴォワールは2か所でブルドゥクスの小説を引用し、女性の生き方や、社会や男性との関係を鋭く突いたものとしてコメントしている。

「ルイーズの日々」は名指されない(リエージュらしき)地方都市の「奥様Madame」宅で通いの家政婦をするルイーズLouise(姓は書かれていない)とその娘オデットOdette,そしてボーイフレンドのボブBobが登場人物である。なぜ、いつから夫がいなくてボブとつきあっているのか、なぜ家政婦をしているのか、自宅はどこか、など背景は全く謎であるが、他者、つまりボブへの愛、またそれ以上に「奥様」への憧れと愛によってルイーズの存在が保たれているのは、他のテキストと共通するテーマである。ルイーズは日々娘の面倒を見、野菜の皮をむいて料理をし、洗い、磨く。ささやかな楽しみは夜に街に出てカフェで一杯飲み、時々ボブと会うことだ。愛は純粋だが、始まりも到達点もなく、ただ偶然にまかせて会い続けるだけだとルイーズは知っている。季節の移ろう中、「奥様」がいて、この場、この瞬間こそ意味があるのだと悟るのがテキストの結末である。

実存主義の枠に留まらず、「日常性の詩学」とでも名付け得る美しいテキストには、17世紀オランダ風俗画や19世紀末ベルギー象徴派とのつながりも見てとれる。



ルイ・ポール・ボーン／Louis Paul Boon (1912-1979)

(紹介：板屋嘉代子)

アールスト出身。労働者階級家庭に生まれたボーンは、16歳から父を助けるため働きながら芸術学院でアートを学ぶが、学費が払えず中退した。

第二次世界大戦が勃発し、ボーンは兵士となり1940年に戦争捕虜として収容された。当時の体験を記した『私の小さな戦争 *Mijn kleine oorlog*』(1947年)は、第二次世界大戦に関するオランダ語文学の傑作と評価されている。

今やオランダ語文学の最高峰とみなされるボーンだが、1942年のデビュー作『近郊都市は成長する *De voorstad groeit*』でフランダースの文学賞レオ・J・クレイン賞を受賞したものの、初期の作品はあまり評価されなかった。下層社会の実情をリアルに再現したことや率直な性表現、シニシズムおよび反宗教主義といった異端な内容や、奔放な語法が物議を醸した。1950年代になり性表現の自由や政治に対する関心が高まったことを受け、批評家たちはボーン作品を認めるようになる。1966年には全作品に対して贈られるコンスタンティン・ホイヘンス賞を授与された。ボーンはノーベル文学賞の受賞候補として有力視されていた。1979年5月11日にスウェーデン大使館に招かれていたが、その前日に心臓発作を起こし帰らぬ人となる。



©Jo Boon

代表作に『チャペルロード *De Kapellekensbaan*』(1953年)とその続編『テルミューレンの夏 *Zomer te Ter-Muren*』(1956年)および『メヌエット *Menuet*』(1955年)がある。

ボーンの最高傑作となった『チャペルロード』は、それまでの作品がフランダースではあまり受け入れられなかったため、ベルギーの出版社マントーから出版を拒否された。『チャペルロード』は7カ国語に、『メヌエット』は6カ国語に翻訳されている。

ボーンは作品で自由と幸福を追い求める人物を描いた。彼らは自由や幸福になかなか手が届かない社会に抗いながらも大抵小さな幸せを手に入れる。そこには「僅かで貴重な瞬間にこそ価値がある」というボーンの人生観が透けて見える。



「陰気なクロウタドリ *De triestige merel*」は1962年に出版された『不思議の国の青ひげと墮落した子どもたちのための残酷な童話集 *Blauwbaardje in Wonderland en andere grimmige sprookjes voor verdorven kinderen*』に収録されている。フロイト以来、一見無邪気なおとぎ話の裏には残忍さやエロチシズムが隠されていると考えられている。ボーンはグリム童話を起点に『墮落した子どもたちのための残酷な童話集』の構想を練り、抑圧されたエロチシズムや隠れた衝動、サディズムといった残忍な欲望などをあからさまな手法で白日の下にさらした。率直な庶民的ユーモア、大胆で白々しい冷笑、あつと言わせるファンタジーといった真正の童話に見られる本質的な要素は、ボーン作品にも見ることができる。

ヒューホ・クラウス／Hugo Claus (1929–2008)

(紹介：三田順)

1929年ベルギー・オランダ語圏ヴラーンデレン地方の古都ブリュッヘ（仏：ブリュージュ）に生まれる。多感な時期を第二次世界大戦中のドイツ占領下で過ごし、戦後、美術アカデミーで学ぶ一方、若干十八歳で処女詩集を発表し、文壇に登場する。以後しばらく故国を離れてフランス、イタリア等で活動し、パリ時代にはデンマーク、ベルギー、オランダの芸術家が集った前衛芸術団体コブラ（CoBrA）に詩人、画家として参加した。1950年に発表した処女長編『メツィールス家 *De Metsiers*』（澁澤龍彦訳『かも猟』）で高い評価を得て文壇での地位を確立する。以後も詩、散文、戯曲を次々と発表するだけでなく、映画監督、画家としても優れた作品を残している。私生活では映画『エマニエル夫人』で知られるオランダの女優シルヴィア・クリステルとの交際で話題を振りまいた。



foto: Klaas Koppe

1983年に発表した半自伝的長編『ベルギーの嘆き *Het verdriet van België*』は、オランダ語文学で最も重要な作品の一つに数えられ、十五カ国語以上に翻訳されている。生涯に亘って精力的に作品を発表し続けたクラウスはノーベル文学賞候補に幾度も名を挙げられ、オランダ語作家として初の受賞が期待されたが、アルツハイマー病の進行を受けて2008年にベルギーで安楽死を選択した。

主要作品

- 1947 『小詩編 *Kleine reeks*』（詩集）
- 1950 『メツィールス家 *De Metsiers*』（長編）：澁澤龍彦訳『かも猟』（1987年、フランス語訳からの重訳）
- 1958 『黒き皇帝 *De zwarte keizer*』（短編集）
- 1969 『金曜 *Vrijdag*』（戯曲）
- 1983 『ベルギーの嘆き *Het verdriet van België*』（長編）
- 1984 『ヴラーンデレンの獅子 *De Leeuw van Vlaanderen*』（映画脚本、監督）
- 1996 『噂 *De geruchten*』（長編）
- 2000 『夢遊病 *Een Slaapwandeling*』（中編）



イエルーン・ブラウエルス/Jeroen Brouwers (1940-)

(紹介：井内千紗)

1940年バタヴィア（現在のジャカルタ）で会計士の息子として生まれたブラウエルスは、幼少期を日本軍による収容所で過ごし、終戦後、家族でオランダへ移住した。戦時中の体験をもとにした作品として、これまで下記で紹介する *Bezonen rood* のほか、*Het verzonkene*、*De zondvloed* の3作品を発表している。高校卒業後は兵役を務め、アムステルダムの出版社、ブリュッセルの出版社で編集者として勤務する。1976年には出版社を退職し、作家として本格的に活動を開始する。オランダ、ベルギーと活動拠点を移動しながら、今日に至るまで小説やエッセイをコンスタントに発表し続けている。実体験に基づくものや自伝的要素の強い作品が多い。



foto: Stephan Venfleteren

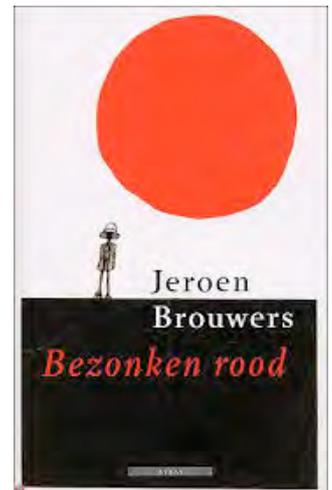
ブラウエルスは厳密に言えばオランダ人作家である。一方で、ベルギーに関するエッセイを数多く発表しており、これらを読むと「異文化」としてのベルギーに対する彼の並々ならぬ関心がうかがえる。ベルギーでは彼の活躍ぶりをたたえ、フランデレン版「偉大なるベルギー人」の511人目に非公式の候補者リストから選出されたり、1993年にはフランデレンの獅子勲章、翌年にはベルギー国王から勲功爵の勲位を授与されている。2007年にはこれまでの功績に対し、オランダ語統一同盟 (Taalunie) より「戦後オランダ語文学の立役者であり、自叙伝や回顧録を成熟した文学ジャンルへと昇華させた。彼ほどオランダ語圏内の国境の架け橋の役割を担っている者はいない」との評価を受け、オランダ語文学賞を受賞した（しかし、その後賞金額が低いとの理由から賞を返還している）。70歳をすぎた現在も、ベルギーの片田舎で精力的に文筆活動をつづけている。

作品紹介： *Bezonen rood*（うわずみの赤）

<あらすじ>

主人公（私）は母が老人ホームで孤独死したという知らせを受け、疎遠だった母親との複雑な関係を省みる。母親との関係がいびつなものとなった背景として、幼少期に母、祖母、姉とともに過ごした日本軍による強制収容所での体験が影響していると思いたち、そこでの生活を回想する。物語は強制収容所での生活という過去と、母の死と元妻リザとの関係という現在が交錯し展開する。

- ・英語、仏語、ドイツ語、日本語、ノルウェー語、ポーランド語、ポルトガル語などに翻訳され、1995年にフランスで Femina étranger 賞を受賞。
- ・Toneelhuis（アントウェルペン）と Ro theater（ロッテルダム）が2005年に共同舞台化。米国、フランスなどでも上演される。



その他、主な作品

小説： *Het mes op de keel* (1964、短編集)、*Zonder trommels en trompetten* (1973)、*Het verzonkene* (1979、Multatuli賞受賞)、*Bezonen rood* (1981)、*Zondvloed* (1988)、*Geheime kamers* (2000、Gouden Uil、AKO文学賞、Multatuli賞)、*Bittere bloemen* (2010、AKO文学賞、Libris賞)

回顧録、エッセイ： *Groetjes uit Brussel* (1969)、*Mijn Vlaamse jaren* (1978)、*Sire, er zijn geen Belgen* (1988)

会員コラム

COLUMN 1

作家紹介 レオナルト・ノーレンス Leonard Nolens (1947-)

三田順 (日本学術振興会特別研究員 PD)

2013年のノーベル文学賞の候補者に挙がり、一部で俄に注目を集めたレオナルト・ノーレンスは、現代ベルギー・オランダ語文学を代表する詩人として知られる。1947年にオランダ国境にほど近いリンビュルフ州のブレー (Bree) に生まれたノーレンスは、翻訳学を修めた学生時代から現在までアントウェルペンを拠点に活動している。1969年のデビュー当初は装飾的な言葉遣いによる実験的な作風が特徴であったが、80年代後半から簡潔な文体で深い思索を表現するようになる。その詩作品では、愛や友情、生を巡る普遍的な主題と並び、詩を書くという行為、詩の語り手自体が問われており、日記という形で公開されたその創作の裏側は専門家から高い評価を得ている。デビューした年から現在に至るまで、ほぼ毎年作品を発表し続けており、オランダ語で執筆する詩人に与えられる主要な賞を数々受賞している。2012年には、ベルギーおよびオランダのオランダ語作家に与えられる文学賞の中で最も権威ある「オランダ語文学賞」を受賞し、名実共にその地位を揺るぎないものとした。

とはいえ、専ら詩人として活動してきたノーレンスの知名度は母国ベルギーでも高くはない。これまでにフランス語訳されたのはフランスで出版された二冊のみで、ベルギーのフランス語圏で積極的に受容されているとは考え難い。ベルギーのオランダ語圏、ヴラールンデレンであっても彼の作品を実際に読んだことのある人は稀で、大学人であっても名前を聞いたことがあるというのが関の山のようである。一般的に文学自体が日本より遙かに読まれていないヨーロッパにあって、詩の読者が一段と稀少な存在であるのは言うまでも無い。かてて加えてベルギーのような小国では読書好きであっても自国の作家を読む人口は少なく、フランス語圏ではフランス文学、オランダ語圏では英語文学が一般的に好んで読まれている。

これまで彼の作品はフランス語、イタリア語、ドイツ語、セルビア語、ポーランド語、ハンガリー語でそれぞれ一、二冊翻訳出版されるに留まり、英語では数編の翻訳が雑誌掲載されているのみで、スウェーデン語には翻訳もされていないため、今年ノーベル文学賞の候補に挙がった (と英ブックメーカーに予想された) のは唐突の感があった。現代オランダ語文学の二

大巨匠であるヒューホ・クラウス (ベルギー)、ハリー・ミュリシュ (オランダ) も何度となく候補とされながら受賞の叶わなかったノーベル文学賞は、未だオランダ語作家が受賞したことはなく、ヴラールンデレンとオランダの文学関係者の間では、どちらから最初に受賞者が出るか競争意識もあるようである。実績、国際的な知名度を考えると、ノーレンスより前から候補に挙がっているオランダのセース・ノーテボームに分があるように思われるが、いずれにせよ今年新たにノーレンスが候補とされ、国際的な耳目をひいたことはオランダ語文学にとって明るいニュースであった。

主要作品

- 1969 『オルフェウスの手 *Orpheushanden*』 (詩)
- 1988 『出生証明書 *Geboortebewijs*』 (詩)
- 1990 『愛の告白 *Liefdes verklaringen*』 (詩)
- 2007 『裂け目 *Bres*』 (詩)
- 2009 『ある詩人の日記 1979-2007 *Dagboek van een dichter 1979-2007*』 (全日記)
- 2012 『生き様 *Manieren van leven*』 (1975年から2011年までの全詩集)

参考資料

オランダ文学基金内の翻訳データベース : <http://www.letterenfonds.nl/>

オランダ語文学賞 : http://prijsderletteren.org/Leonard_Nolens.php

オランダ語文学電子図書館 : <http://www.dbnl.org/>

ポエトリー・インターナショナル : <http://www.poetryinternationalweb.net/>

ノーレンスによる自作朗読 (六編) : http://www.lyrik_line.org/en/poems/inspiratie-1116#.UqVlpOKb5SA

「美術作品」を日常生活に見出すこと—マルセル・ブロータースの「読む」イメージと美術をめぐる制度への懐疑について—

利根川由奈（京都大学）

「映画をめぐる美術—マルセル・ブロータースから始める」展（京都国立近代美術館、2013年9月7日～10月27日）は、そのタイトルが示す通り、ブロータースの映像作品に主に1990年代以降の現代美術における映像作品の源流を見出そうと試みた展覧会であった。

マルセル・ブロータース（1924-1976）はブリュッセルに生まれ、詩人として活動しながら16～17歳でブリュッセルのシュルレアリストと交流を結び、1964年から本格的に造形作品の制作を始めた芸術家である。詩人としてはステファヌ・マラルメとシャルル・ボードレー、造形作家としてはマルセル・デュシャンとルネ・マグリットから大きな影響を受けた。彼の作品は、卵の殻の上に”moules”と書いた作品《誤り》（1966）のように、イメージやオブジェと言葉の齟齬を顕在化させることによって「イメージ」と「言葉」との関係問い直すこと、また、ムール貝の殻という廃材を使用した《大鍋のムール貝》（1966）のように、本来は美術作品になりえない素材を使用したり、自らフィクションの美術館《近代美術館・鷺部門》（1968-1972）を開いたりすることによって、美術作品を成り立たせる仕組みを問い直すことにその特徴がある。本展覧会で出品されたブロータースの映像作品は、《近代美術館・鷺部門》の一つのセクションとして、1971年にドイツ・デュッセルドルフで開かれた《映画セクション》に出品されたものである。

本展に出品されたブロータースの映像作品にも、上記に挙げた2つの特徴が顕著に表れていると言える。「イメージ」と「言葉」との関係については、《雨（テキストのためのオブジェクト）》（1969）で示されている。この作品は、雨に濡れながらブロータースがインクペンで手紙を書く様子を取めた映像作品である。この作品では、雨に濡れるうちに、今まで書いていた文字が水で流れ、次第に消えていく。それでもブロータースは書くことをやめない。この一連のシークエンスで表現されているのは、文字の役割の再考だと考えられる。文字は書かれ、その読者にシニフィエとしての意味を伝達することで初めて意義を持つ。しかし、この作品における文字は、読者に読まれることがない点で「意味を伝達する」という文字としての役割を喪失している。そう考えると、ブロータースの書き続ける行為は、文字の本来の役割から考えると無意味な行為である。では彼はなぜそれでも書き続け、その様子を映像作品にしたのか。その理由として考えられるのは、意味伝達を本義とする文字の

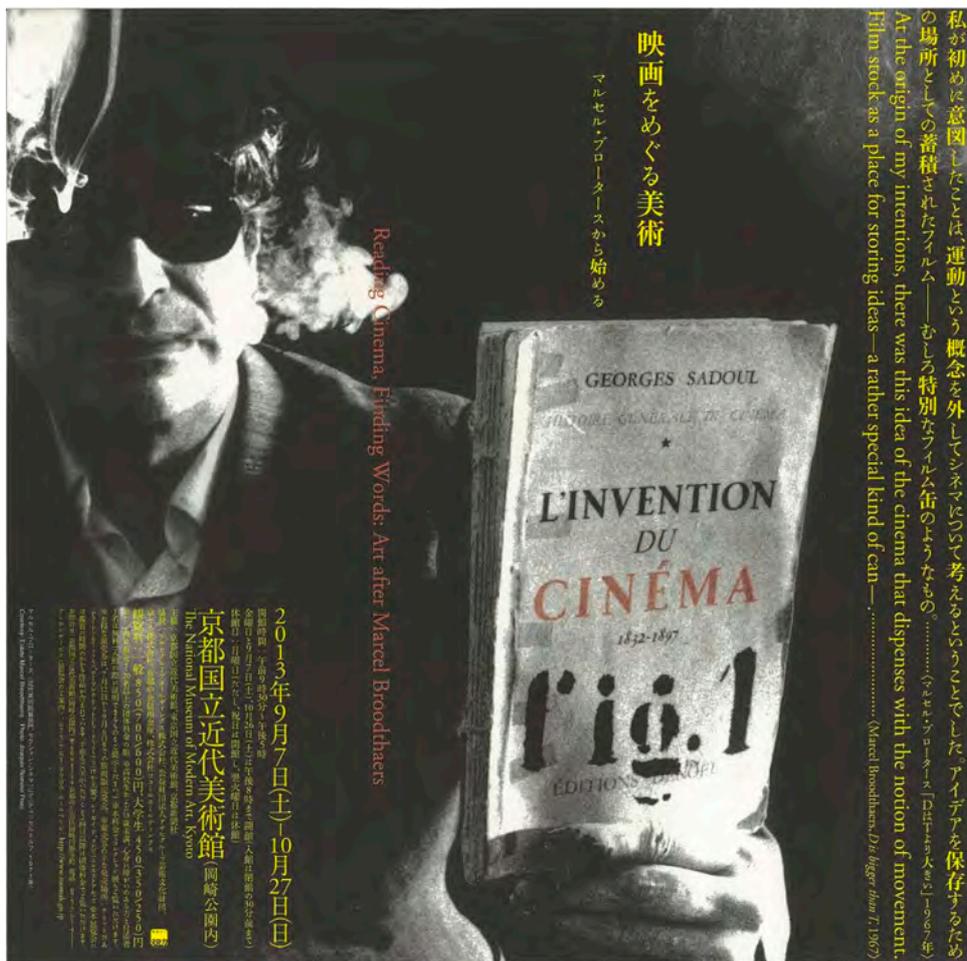
役割と「書く」行為の意義を問い直すためであろう。その意味を伝えられなければ文字を「書く」行為は無意味かと言えばそうではない。映像においてはその意味を行為から「読む」ことが要求されるためだ。すなわちこの映像は、テキストからではなく、映像イメージから意味を見出すことを鑑賞者に要求する作品だと言える。この作品と対照的な作品は、アクラム・ザタリの《明日には全てうまくいく》（2010）であろう。ザタリの作品は、ブロータースの《雨》で示された読解できる行為としてのイメージを、再びテキストに還元することを試みた作品であると理解できるからだ。この作品では、男女のラブストーリーという話の筋書きとその映像イメージが決められているものの、それを映像化するのではなく、登場人物の台詞のみをタイプライターで打つ様子を淡々と映している。そのために鑑賞者は、台詞を発する人物の表情や場の雰囲気などの情報が一切書かれていない台詞のみのテキストから、提示されていない不可視の情景を想像することを強いられる。鑑賞者のこの行動は、ブロータースの《雨》において鑑賞者が行為のイメージからその意味を読み取ろうと試みることは正反対の鑑賞方法だと言えるだろう。

美術作品を成り立たせる仕組みを問い直す点は、《カラスと狐》（1967-1972）に見出すことができる。《カラスと狐》は映像、カンヴァスに印刷された写真、ポール紙に印刷されたタイポグラフィなど、異なるメディアの作品が組み合わせられたインスタレーション作品である。彼はこの作品において、イメージを記録するための映像、テキストを記すための本、オブジェを写すための写真、といったメディアの差異を、テキストを映像のオブジェとして撮影する、絵画を描くためのものであるカンヴァスに写真をプリントするなどの行為によって、意図的に混交している。その行為は、作品は制作年代・メディア・様式の差異によって機械的に分類されるため、その本質が見失われかねないという美術作品を規定する制度に対するアンチテーゼだと思われる。たとえば彼は《近代美術館・鷺部門》の《形象セクション》（1972）において「鷺」をモチーフとした美術品や広告を区別なく展示し、全ての展示品に「これは芸術ではない」というキャプションを付けたことによって美術作品の定義を問い直した。こうした《形象セクション》における問題意識を踏まえれば、彼は様々な要素を含むインスタレーションを《カラスと狐》と名付けて一つの作品とすることで、美術作品の規定を壊し、その上での再構築を試みたと言える。ブロータースの作品に見られる美術作品の

定義に対する懐疑の姿勢は、たとえば田中功起の作品に見出すことができる。田中は《犬にオブジェを見せる》(2010)において、紙コップやボールなどの日用品を犬に見せ、それらを使って自由に遊ばせる。この一連の動作を映像として記録したものを展覧会では流し、その周囲にはこの映像で使用したオブジェを配置する。この作品において田中は、何が美術作品なのかの明確な見解を示してはいない。つまり、この作品では、飾られた日用品、日用品と戯れる犬の映像、その全てを含むインスタレーション、その何を「作品」と規定するのかの決定権は観賞者に委ねられている。そのため鑑賞者は、美術館や作者によって与えられた規定に従うのではなく、自ら何が「作品」なのかを考えなくてはならない。そのためこの作品を体験した後では、鑑賞者は日常生活の中に「作品」を見出す視点を得ることができるだろう。そしてこの鑑賞者の視点の変化は、ブロータースが求めたものとも重なると思われる。というのも彼は、鍋などの日常的な事物やムール貝や卵の殻などの廃品を作品に用い

ることを通して、日常生活の中にも「作品」が存在する可能性を提示したためだ。その点で田中は、ブロータースの示した美術作品の規定への懐疑を、より現代的な方法で表現したと解釈できるだろう。

一見、ブロータースの《雨》と《カラスと狐》の投げかけの問題は別のベクトルを向いているように見える。しかしながら、ブロータースにとって行為のイメージを「読む」ことと、美術作品の規定を問うことは連関した問題だったように思われる。なぜなら、行為のイメージを「読む」対象としての「作品」と考えるならば、我々の日常生活におけるあらゆる行為は「作品」となる可能性を秘めているためだ。日常生活の中に「作品」を見出す可能性を鑑賞者に示すこと、ブロータースの映像作品に見いだされるこの問題意識は、さまざまに表現形式を変えながら、現代においても多くの映像作家に継承されていると言えよう。



「映画をめぐる美術—マルセル・ブロータースから始める」展
(京都国立近代美術館、2013年9月7日～10月27日) フライヤー

COLUMN 3

神戸大学国際文化学研究所異文化研究交流センター・ブリュッセル王立音楽院共催
第43回研究会 レクチャーコンサート「Belgian Art Songs」の記録

大迫知佳子（日本学術振興会 海外特別研究員 / ブリュッセル自由大学）

ベルギー研究会 第43回定例研究会が、2013年2月7日（木）にブリュッセルで開催された。研究会は2部構成であり、第1部では神戸大学ブリュッセルオフィスにて4名の方の研究発表が、第2部ではブリュッセル王立音楽院<Chêne>にて講演と演奏会が行われた。研究発表および講演の詳細はそれぞれの発表者や講演者の報告・論文等に譲り、本記録では王立音楽院での演奏会を話題の中心としよう。

「Belgian Art Songs」と題されたこの演奏会は、神戸大学教授岩本和子先生の発案、ブリュッセル王立音楽院講師（声楽）正木裕子先生の企画・運営による。ピアニストに同音楽院ローランス・ヴェルナ氏を迎えて、正木先生と、その門下で学ぶ若い音楽家達が演奏を担い13作品を好演した。すべての演奏作品は、19世紀後期から20世紀にかけてベルギーを中心としたフランス語圏に生きた作曲家・詩人達に関するものであり、プログラムノート（表紙は写真1）には、演奏曲目だけでなく、これらの各作曲家・詩人達の伝記的な事柄や歌曲の原詩、その他有用な関連情報が詳細に盛り込まれていた。作曲家として紹介されたのは、ギヨーム・ルクー

(Guillaume Lekeu / 1870 Verviers - 1894 Angers)、ジョゼフ・ジョンゲン (Joseph Jongen / 1873 Liège - 1953 Spa)、フランシス・ドウ・ブルギニオン (Francis de Bourguignon / 1890 Saint-Gilles, Bruxelles - 1961 Bruxelles)、そしてジャン・アプシル (Jean Absil / 1893 Bon-Secours - 1974 Uccle, Bruxelles) である。いずれの作曲家もベルギーは無論のこと、会場となったブリュッセル王立音楽院とも縁が深い。一方、歌曲の作詩者としては、エミール・ヴェルハーレン (Emile Verhaeren / 1855 Anvers - 1916 Rouen)、ジョルジュ・ローデンバック (Georges Rodenbach / 1855 Tournai - 1898 Paris)、モーリス・メーテルランク (Maurice Maeterlinck / 1862 Gand - 1949 Nice)、アドルフ・アルデイ (Adolphe Hardy / 1868 Dison - 1954 Verviers)、ノルジュ (Norge [Georges Mogin] / 1898 Bruxelles - 1990 Mougins)、モリス・カレーム (Maurice Carême / 1899 Wavre - 1978 Anderlecht) 等、ベルギー象徴派を代表する詩人達が中心に取り上げられていた。さらに日本人作曲家の日野原秀彦氏の作品《黄昏 Douceur du soir (2004)》(ローデンバック作詩 / 神戸で初演) が奏され、詩の翻訳者としての上田敏にも言及がな

されるなど、音楽を通して日・白・神戸の関係の深さを垣間見ることもできた。

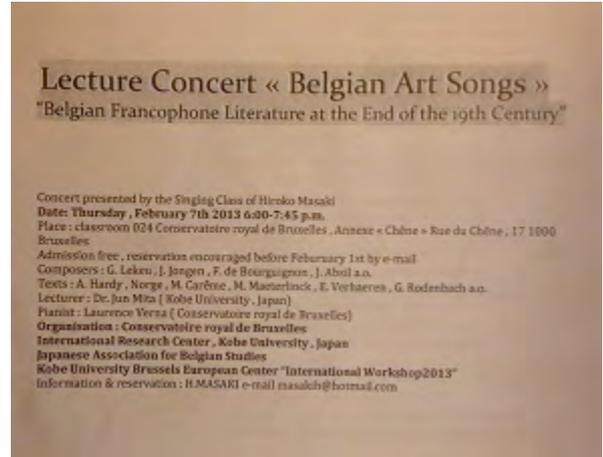


写真1：「Belgian Art Songs」プログラムノート表紙

演奏会プログラムの中で、特に記録者の印象に残った作品について記しておきたい。ジョンゲンの歌曲《不幸な人々 Les pauvres (op. 64, 1919)》(ヴェルハーレン作詩)は「あまりにも悲しみに満ちた内容であるため生徒のだれかにこの曲を渡すことが憚られた」、という理由で正木先生御本人の演奏による(ヴェルハーレンの原詩を参照されたい)。同じくジョンゲンの作品《子守歌 Berceuse (opなし, 1936)》は、プログラム内で唯一の純器楽曲であり、穏やかな曲調がその名の通り優しい眠りを連想させた。《メーテルランクの4つの詩曲 Quatre poèmes de Maeterlinck (op. 12, 1933)》から抜粋された《シャンソン Chanson》と《30年探した J'ai cherché trente ans》、またカレームの《恩寵の時 Heure de grâce (op. 98, 1958)》から抜粋された《嵐 Orage》はすべてアプシルの作曲によるものであるが、曲調には、印象主義の音楽—文学における象徴主義ともしばしば関連づけられる—という感じを受ける一方で、同時代の詩人ノルジュと作曲家ブルギニオンによる《ノルジュの2つの詩曲 Deux poèmes de Norge (op. 10, 1955)》からの抜粋《クレーロン Clairon》には、後期ロマン主義の影響が強いという印象を受けた(プログラムノートによると、ブルギニオンの初期作品は印象主義、そののち古典的な手法に回帰したとのこと)。演奏会の最後は、現代ベルギーの脚本家ステノ (Véronique Steeno / 1950 Malines-)による《ティル・オイレンシュピーゲル Til Uilenspiegel》からの抜

粹で、ベルギーのフランドル地方の小さな家でのワンダとソフィアのワンシーンで締めくくられ、ソフィアの美声と時折差し挟まれるコミカルな演技が会場を感動と笑いで包んだ。

本演奏会で取り上げられた作曲家達は概して多作家の部類に入る。それにも関わらず、彼らの残した作品の演奏機会はベルギーにおいてさえ決して多いとは言えない。「Belgian Art Songs」は、丁寧なプログラムノートと演奏者の解説とともにこれらの作品の演奏を聴く貴重な機会となった。演奏会後の演奏者を交えた立食パー

ティーと、マネケンピス近くのレストランで行われた打ち上げも、研究発表、講演、そして演奏会の成功を受けて大いに盛り上がった。次回のブリュッセルでの研究会は言うまでもなく、第2回演奏会の開催が待ち望まれる。

* 素敵な演奏をお届け下さった、正木先生をはじめとするブリュッセル王立音楽院の皆様、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

Programme

Jongen-Hardy	« Bal de Fleur » op. 25-4 (l'année de composition 1902)	Jiaqi Xu- Laurence Verna
Jongen-Verhaelen	« Les pauvres » op. 64 (1919)	Hiroko Masaki- Laurence Verna
Jongen	« Berceuse » sans op (1936) (pour violon et piano)	Akiko Okawa- Laurence Verna
Absil-Maeterlinck	extrait de « Quatre poèmes de Maeterlinck » op. 12 (1933) No. 1 « Chanson » (Les trois soeurs aveugles) No. 3 « J'ai cherché trente ans »	Janelle Lucyk- Laurence Verna
Absil-Carême	extrait de « Heure de grâce » op. 98 (1958) No. 1/3 « Orage »	Noriko Yakushiji-Tomoyo Masuda
De Bourguignon-Norge	« Deux poèmes de Norge » op. 10 (1955) - Clairon - Le négre-boulangier	Jeysson Estrella-Diaz- Laurence Verna
De Bourguignon-Alfred de Musset	« A Pépa » op. 53-b (1937) (Trio pour piano, violoncelle et chant)	Noriko Yakushiji-Thibault Seillier-Tomoyo Masuda
Lekeu-Lekeu	extrait de « Trois poèmes » (1892) No. 2 « Ronde » No. 3 « Nocturne »	Wei-lian Huang- Laurence Verna
Hinohara-Rodenbach (Ueda)	« Douceur du soir » (2004)	Noriko Yakushiji-Tomoyo Masuda
Guerdjikov-Steenon	extrait de comédie musicale « Til Uilenspiegel » scène et l'air de Sofia "I fell in love today"	Wanda : Janelle Lucyk Sophia : Radostina Kacarova Jaroslav : Jeysson Estrella-Diaz

お知らせ

■会員刊行物紹介

巻頭で紹介しました『「ベルギー」とは何か？ーアイデンティティの多層性ー』とは別に、2013年に刊行された会員の出版物を3点ご紹介します。

BOOK 1



フランダースの声

ー現代ベルギー小説アンソロジーー

編：フランダースセンター

2013年11月30日、125頁、松籟社、非売品

ISBN:978-4-87984-321-0 C0097

2010年、2011年に開催したフランダースセンター主催「フランダース文学翻訳セミナー」の参加者5名が、フランダースの現代小説短編を翻訳し、フランダースセンター監修のアンソロジーとしてこのたび出版されました。収録されているのは5作品のみですが、フランダースの現代文学を代表する作家から若手の人気作家まで、フランダース文学のあらゆる側面が味わえる1冊となっています。（井内千紗[東京文化財研究所]）

目次

[巻頭エッセイ]不思議にも釣り合った何か 池田扶美代

まえがき

グループでスキップ アンネリース・ヴェルベーク / 井内千紗

一発の銃弾 アンネ・プロヴォースト / 板屋嘉代子

茂みの中の家 ヒューホ・クラウス / 三田順

完全殺人（スリラー）トム・ラノワ / 鈴木民子

正真正銘の男 クリストフ・ヴェーケマン / 鈴木義孝

作家・作品紹介

訳者紹介

BOOK 2



ハプスブルク史研究入門—歴史のラビリンスへの招待—

編： 大津留厚・水野博子・河野淳・岩崎周一

2013年5月30日、336頁、昭和堂、定価＝本体2,800円＋税

ISBN: 9784812213155

第2章「ネーデルラントの統一と分裂」（加来奈奈）

第7章「南ネーデルラントにみる「国民概念の変遷」」（阿南大）

ヨーロッパにおけるハプスブルク支配に関して、幅広い時代と地域を包括した日本初の研究入門書である。広大な領域統治のなか、地域ごとに多様な支配体制がとられ、その政治的境界線も時代とともに変化した。そのため、ハプスブルク史を一つの歴史として捉えることは難しく、この入門書はハプスブルクの迷宮への入り口に過ぎない。しかし、現在、国民国家ないし一国史的歴史認識の限界が問われるなかで、ハプスブルク支配下で行われた多様な地域形成や人と国家の結びつきの在り方は多くの視座を提供してくれる。

ベルギーとの関係からいえば、建国前史として、第2章と第7章でこれまでほとんど日本で論じられることがなかった近世の南ネーデルラントが扱われている。（加来奈奈[奈良女子大学]）

BOOK 3



言語帝国主義—英語支配と英語教育—

著：ロバート・フィリップソン

訳：平田雅博、信澤淳、原聖、浜井祐三子

細川道久、石部尚登

2013年3月10日、416頁、三元社 定価＝本体3,800円＋税

ISBN: 978-4883033300

英語はいかにして世界を支配したのか？ 英語教育が果たしてきた役割とは？ 論争の書、待望の邦訳。——グローバル化の時代に英語教育を推進することは、必然なのか。英語は、いかにして世界のヘゲモニー言語となったのか。第三世界における英語学習への「援助」は、南北間の不平等や搾取の永続化に資したのではないか。英語教育の専門家は、ヘゲモニーを確立する過程で、またその維持のために、いかなる役割を果たしているのか。言語政策・言語教育への批判的・総合的アプローチ。（三元社ウェブサイトより）

■今後の予定

第51回研究会

日時：2014年2月9日（日）13:30-17:30

会場：西宮市大学交流センター、講義室1

<発表>

「マグリットにおけるベルギー/ベルギーにおけるマグリット」

利根川由奈（京都大学）

「ベルギー象徴派のウィーンとスロヴェニアにおける受容」

三田順（学振特別研究員PD）

「ベルギー／ケベックの仏語圏文学の現在」

岩本和子（神戸大学）

[コーディネーター：岩本和子]

第52回研究会（ブリュッセル）

日時：2014年3月5日（水）13:00-19:30

共催：神戸大学異文化研究交流センター（IReC）

— 第一部 —

会場：神戸大学ブリュッセルオフィス

時間：13:00-16:30

<発表>

「我々と奴ら」の変容」

石田まりこ（ブラッセルインター校）

「公的権力の存在を前提としない「事実上の正書法」の固定化」

石部尚登（日本大学）

「独立後のベルギー王国におけるナショナル・アイデンティティ形成への音楽の関与—ブリュッセル王立音楽院の音楽理論教育に焦点をあてて—」

大迫知佳子（ブリュッセル自由大学(ULB)）

「聖なる画中画—ペトルス・クリストゥス作《若い男性の肖像》に描かれた「聖顔」と贖宥—」

杉山美耶子（ヘント大学）

— 第二部 —

会場：シャルリエ美術館

時間：18:00-19:30

<講演>

「「ベルギー美術史」の諸相—初期フランドル派からシュルレアリスムまで—」（英語）

利根川由奈（京都大学）

「ブリュッセル芸術サロン「自由美学」とマーテルランクとその周辺」（仏語）

正木裕子（王立ブリュッセル音楽院）

<演奏会>

-Henri Duparc (1848-1933) / Charle Baudelaire (1821-1867), « *L'invitation au voyage* » (C.1870)

-Henry Février (1875-1957) / Maurice Maeterlinck (1862-1949), Extrait d'opéra « *Monna Vanna* » (1909)

-Claude Debussy (1862-1918) / Maurice Maeterlinck, Extrait d'opéra « *Pelléas et Mélisande* » (1902)

-Claude Debussy / Pierre Louÿs (1812-1889), *Chanson de Bilitis* (1897)

-François August Gevaert (1828-1908) / Victorien Sardou (1831-1908), Extrait d'opéra « *Le Capitaine Henriot* » (1864)

[コーディネーター：中條健志（第一部）、正木裕子（第二部）]

■募集

1.研究発表募集

研究会では、会員のみなさまの研究発表を募集しています。

特にまだ発表をされていないかたには自己紹介も兼ねて、なるべく早めにご発表いただきますようお願い申し上げます。

また、会員のみなさまには発表の司会を事前にもお願いすることもありますので、その際にご協力のほどよろしくお願いいたします。

<発表要領> 調整担当:岩本

※回によって調整役は変わります。

発表時間:最長1時間(質疑応答2,30分)

分野:不問。

発表予定の方は、指定の期限までに発表要旨(500字程度)の提出をお願いいたします。

要旨の例は本研究会ホームページおよび本会報5-8ページをご参照下さい。

2.「ベルギー研究会会報・第3号」掲載記事・コラム募集

ベルギーに関する記事やコラムを募集しています。ベルギー滞在中の会員の方からの最旬情報や書評、美術批評など、掲載記事を随時受け付けております(次号は2014年12月発行予定)。

3.会員募集中

研究会の活動拠点は関西にありますが、会員は国内外問わず募集しています。お知り合いでベルギー関連の研究をされてるかたがいらっしゃいましたら、是非本研究会をご紹介ください。

入会受付窓口:belken040807@gmail.com (担当:井内)

■ベルギー関連のイベント

編集者の独断と偏見で、近々国内で実施予定のベルギー関連のイベントをいくつかご紹介します。

ピーピング・トム「フォー・レント」【舞台芸術】

日 時：2014年3月1日（土）

開 演：14:00（開 場 13:30）

会 場：兵庫県立芸術文化センター 阪急中ホール

主催 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

後援 ベルギー王国大使館、公益財団法人フラン
ダースセンター

[東京公演]2月17、18、19日 19:00 東京・世田谷パブ
リックシアター

[長野公演]2月23日15:00 まつもと市民芸術館 /実験劇
場

コルンゴルト作曲 歌劇『死の都』全3幕【オペラ】

（ドイツ語上演・日本語字幕付）

開催日：2014年3月8日（土）・9日（日）

時間：両日とも14:00開演

会場：滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール大ホール

主催：公益財団法人びわ湖ホール

<http://www.biwako-hall.or.jp/shinomiyako/#top>

「ブリュッセルから春に寄す音楽の贈り物」【音楽】
ブリュッセル王立音楽院の卒業生のピアニスト、増田
知世とフランス人チェリストのデュオ演奏会

日 時：2014年4月6日（日）

開 演：14:00

会 場：ガットネロ（上本町）

後援 ベルギー研究会

<http://www010.upp.so-net.ne.jp/gatto-nero/>

[岐阜公演]3月29日（土）14:00 真鍋記念館クララ
ザール

[東京公演]4月5日（土）14:00 日仏文化協会汐留ホー
ル

「映画をめぐる美術—マルセル・プロータースから始
める」展【美術展】

期間：2014年4月22日～6月1日

場所：東京国立近代美術館

※コラム2で紹介された展示の巡回展です。

■新規会員紹介

2013年2月から2013年12月までの間に以下5名のかたが新たにベルギー研究会会員になりました（敬称略）。

田中資太 一橋大学社会学研究科・修士課程

佐藤潤一 大阪産業大学教養部・准教授

岡本夢子 京都大学大学院文学研究科・博士課程後期

石田まりこ ブリュッセルインターナショナルスクール・講師

Clara Edouard（ブリュッセル自由大学(ULB)・特別研究員）

2013年末時点会員数：60名

■ベルギー研究会事務局（2013年度）

ベルギー研究会事務局を神戸大学国際文化研究科岩本研究室内に
設置しています。現行の事務局各担当者は、下記のとおりです。

事務局長：岩本和子

運営・企画：中條健志・三田順

ウェブサイト・論文集担当：石部尚登

会報・ML担当：井内千紗

会計：今中舞衣子

翻訳プロジェクト統括：小林亜美・鈴木義孝



ベルギー研究会 会報 第2号

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies, vol.2

発行日：2014年1月15日

編集：井内千紗

事務局：神戸大学大学院国際文化学研究科、岩本研究室内

Website: <http://www40.atwiki.jp/kbek/>